

# 宝塚における韓国小学校の推移

——「在日本大韓民国民団兵庫県宝塚支部」資料による概要——

渡 辺 正 恵

## 目 次

はじめに

第1章 宝塚市と朝鮮人

第1節 宝塚市の地域性について

第2節 宝塚と朝鮮人

第2章 宝塚韓国小学校の沿革

第1節 民族学校

第2節 宝塚韓国小学校の開校と閉校

第3節 宝塚韓国小学校における教育

第4節 宝塚韓国小学校の経営状況

第3章 宝塚韓国小学校をとりまく環境

第1節 宝塚地域における在日コリアンの分布状況

第2節 子どもたちの就学状態及び生活状況

第4章 「小学校指導要録」および「家庭調査」に見る子どもたちの生活環境について

第1節 児童の家庭および周囲の環境

第2節 児童の進路

おわりに

参考文献

## は じ め に

朝鮮半島は現在二つの国家に分断され、在日コリアン、在日韓国人、在日朝鮮人<sup>1)</sup>と呼ばれる彼らは、国籍、立場もさまざまである。思想の違いが教育の場も異にし、ひいては在日コリアンとしての生き方につながっていると思われる。

今回の研究の基となる「宝塚韓国小学校」資料はすべて在日本大韓民国兵庫県民団宝塚支部（以下「民団宝塚支部」）から預かって整理中のものである。1000枚近くの記録や資料の中で、400枚ほどが「宝塚韓国小学校」の事務的な文書である。廃棄寸前のものを民団宝塚支部事務担当の方が拾って保管していた。この資料の存在自体は広く知られていない。さらに資料の存在どころか、宝塚韓国小学校の記述は宝塚市史にはなく、在日コリアンの教育という欄で、戦後同時期に誕生して、2002年4月に伊丹朝鮮初級学校と統合された宝塚朝鮮初級学校の記述がわずかにあるのみである。

貴重な資料を基に、民団系の在日コリアンの戦後の教育の在り方を検証し、閉校に至るまでの原因について探ってみる。

## 第1章 宝塚市と朝鮮人

## 第1節 宝塚市の地域性について

宝塚市は兵庫県南東部に位置し、大阪市と神戸市に挟まれた阪神地域にあり、歌劇と温泉で全国的に名を馳せている。市域は南北に細長く、住宅地が広がる南部市街地と、豊かな自然に恵まれた北部農村地域に分かれて

---

1) 本論文における呼称は戦前は朝鮮人、戦後は在日コリアンとする。

いる。近世においては、武庫川左岸<sup>2)</sup>は摂津国川辺郡<sup>3)</sup>、右岸は摂津国武庫郡<sup>4)</sup>に属していた。「宝塚」という地名に関しては諸説あり、特定された場所はない。

2011年現在、人口は22万人、面積101.89平方キロメートルである。市の成立は1954年で阪神地域の中では遅かった<sup>5)</sup>。

宝塚市史を紐解くと、古来から武庫川右岸には渡来の人が地域を構成していたことがわかり、興味深いのだが、宝塚韓国小学校は武庫川右岸の兵庫県武庫郡良元村にあった。現在の住所名は宝塚市伊子志<sup>いそし</sup>4丁目である。

今も、伊子志4丁目のある武庫川右岸に沿って在日コリアン、その南には沖縄・奄美大島の人たちのコミュニティが存在している。最近はそれに隣接するように、ニューカマーであるブラジル国籍の人たちも多く居住している。

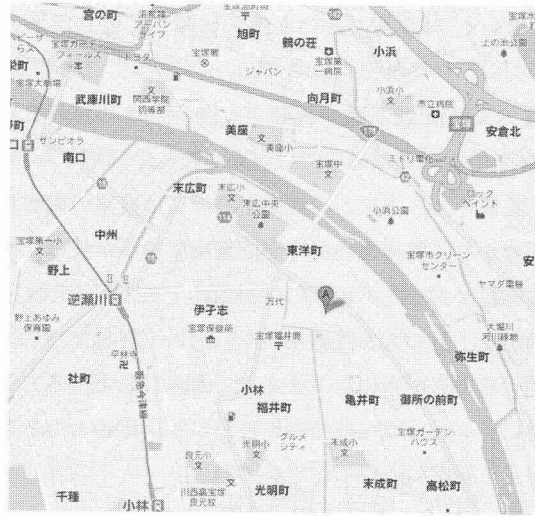
表1 平成21年宝塚市外国人登録人数

韓国・朝鮮	中国	ブラジル	アメリカ	フィリピン	カナダ	インド	イギリス	オーストラリア	ベトナム	フランス	ペルー	その他
2,223	379	323	80	59	27	24	19	14	10	9	6	119

総数 3,292 (平成22年版 宝塚市統計書)

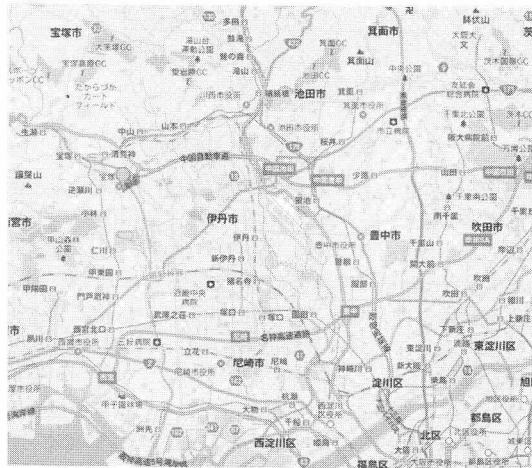
- 2) 武庫川右岸左岸は河上の上流から下流に向かって左側を左岸、右側を右岸と言う。武庫川の場合、左岸は武庫川の東側、右岸は武庫川の西側になる。
- 3) 現在の川辺郡は猪名川町のみ。明治期には伊丹市、川西市全域と宝塚市、尼崎市の大半、三田市の一部を含んでいた。
- 4) 当初の郡域は現在の宝塚市・西宮市・尼崎市の一部。後に現在の芦屋市、神戸市も含む。1954年良元村が川辺郡宝塚町と合併して宝塚市となり、摂津国武庫郡は消滅した。
- 5) 阪神地域は兵庫県下の下記の7市1町をいう。市町の成立は( )内のおりである。尼崎市(1916年)、西宮市(1925年)、芦屋市(1940年)、伊丹市(1940年)、川西市(1954年)宝塚市(1954年)、三田市(1958年)、川辺郡猪名川町(1955年)。

図1 宝塚市南部地域（一部）



この場所に宝塚韓国小学校があった。(Google 地図による)

図2 阪神広域図



この場所に宝塚韓国小学校があった。(Google 地図による)

## 第2節 宝塚と朝鮮人

1914年頃宝塚地域に初めて朝鮮人が来て、神戸水道建設工事を始めとする多くの土木工事に従事した。(鄭鴻永『歌劇の街のもうひとつの歴史 宝塚と朝鮮人』神戸学生・青年センター出版部 1997年)そして、宝塚韓国小学校に関わりを持つのは、武庫川の改修工事に従事してその後宝塚地域に居住した朝鮮人の人たちと思われる。

宝塚を二分する武庫川は江戸時代から洪水を繰り返す暴れ川であった。1897年(明治30年)には現在の宝塚市美座および小浜に位置していた見佐村が大洪水のため消失した記録もあるほどである。

川の氾濫は繰り返され、武庫川改修と失業者対策のために2回に亘って改修工事が行われた。第1期目は1920年から1922年まで、第2期目は1923年から1928年までで、多くの朝鮮人がこの工事に関わった。宝塚韓国小学校の位置は通称「四工場(よんこば)」と呼ばれて武庫川改修工事の2期工事の4か所目の現場であった。武庫川改修工事後も朝鮮人が多く住み、集落を成した。資料に残っている宝塚韓国小学校の住所は「宝塚市伊子志荒地」となっている。「伊子志荒地697番地」と番地のついている場合もある。

宝塚韓国小学校閉校後には現在、民団宝塚支部が入っている建物が新設され、宝塚韓国学園という名前で、成人のための韓国語教室などが開かれている。

## 第2章 宝塚韓国小学校の沿革

### 第1節 民族学校

戦後、在日コリアンの子どもたちのために国語講習所が全国に設立された。宝塚地域でも在日本朝鮮人連盟(以下朝連)宝塚支部朝鮮学院として数校が開校した。その後初等教育を行っていた四工場よんこばの民族学校が「宝塚

韓国小学校」と改称され、1962年に閉校した<sup>6)</sup>。

武庫川対岸の美座地区には「朝連宝塚中央初等学院」があって後の宝塚朝鮮初級学校となった。宝塚朝鮮初級学校は1966年各種学校として認可されたが、2002年伊丹朝鮮初級学校と統合されて、宝塚における民族学校はなくなった。

宝塚韓国小学校開校当時、朝連系の学校の数から比べると、1946年に成立した民団系（当時の名称は在日本大韓民国居留民団）の学校は全国でも少なかった。民団宝塚支部の資料によると、文書のやりとりがあったり、資料の中に名前が見えるのは大阪の金剛学園及び白頭学院、他に東京、京都、倉敷の韓国小学校である。

現在、金剛学園小学校・中学校・高等学校と白頭学院の建国小学校、中学校、高等学校及び京都国際中学校・高等学校は学校教育法で定める1条校になっている。東京韓国学校は私立校として継続している。倉敷の学校については不明で、現在調査中である。

## 第2節 宝塚韓国小学校の開校と閉校

宝塚韓国小学校の現存している資料は1957年から閉校間近と思われる1962年までのもので、断片的である。1958.2.10資料では、1946年4月1日朝連宝塚支部朝鮮学院として開校。1948年4月1日宝塚韓国小学校と改称となっている。しかし1959.8.3資料では開校年月日が1947年4月1日旧朝連時代（資料ママ）となっていて、開校年の食い違いが見られる。とはいえ、朝連宝塚支部朝鮮学院として開校したことは間違いなく「韓国小学校」という名称は内外の情勢から、後から呼称されるようになったのではないかと考えられる。正確にはいつからその名称になったのかは不明である。

---

6) 確定できる資料は今のところないが、聞き取り調査により、閉校は1962年3月と考えられる。

資料のほとんどの書類は旧字体の漢字交じりのハングルである。年号はほとんど檀紀<sup>7)</sup>で表記されている。

### 第3節 宝塚韓国小学校における教育

宝塚韓国小学校校則の第一条では「本校は大韓民国教育法及び学校教育施行令に準拠する。在日本大韓民国児童に義務教育課程と初等普通教育を実施することを目的とする。」とあり、最後の第三十条では「本校は檀紀四千二百八十一年度四月一日から施行する」とある。檀紀4281年すなわち1948年4月にはまだ大韓民国が成立していない。ゆえに記載の法律が成立しているとは思えないため、この校則も後年に作成されたものと思われる。

資料作成日時が不明だが「実態報告書 1959年4月1日～1960年3月」という資料による教科名と時間数は次のとおりである。

表2 宝塚韓国小学校教科名および時間数

学年	国語	日語	算数	理科	日本社会	社会	音楽	図画	体操	作文	ローマ字	書	家庭
1	2	4	4	3	3	1	2	2	2	1			
2	3	5	4	3	3	2	2	2	2	1		1	
3	3	5	4	3	3	2	2	2	2	1		1	
4	3	2	5	4	4	2	2	2	2	1	1	1	1
5	3	2	5	4	4	2	2	2	2	1	1	1	1
6	4	5	5	4	3	3	2	2	2	1	1	1	1

ここでいう「国語」は母国語（韓国語）のことで「日語」は日本語のことである。「社会」は大韓民国からの教科書、「日本社会」は日本の教科書を使っている。本国に帰ったときに困らないようにという意図のもとに始

7) 檀紀または檀君紀元。朝鮮の始祖神である檀君の即位した紀元前2333年を元年とする。宝塚韓国小学校の創立年を1946年とすると、檀紀では4279年である。

まった民族教育であるが、授業数を見ると日本語（日語）や日本社会に時間を多く割いている。

1961年の学習記録によると、2年生では6人中3人が日本語よりも韓国語の成績が若干良い。この時代の両親は在日1世と思われ、集落を成していることもあり、入学時の子どもたちにとっては韓国語のほうが馴染みがあったのかもしれないが、3年生からは韓国語と日本語の成績は同じ、あるいは日本語の成績が良くなっていく子が多い。

#### 第4節 宝塚韓国小学校の経営状況

資料によると、継続的に財政難に悩まされている状態がわかる。1957年1月の実態報告書には、「我が国の歴史と地理の指導において地図一枚無く、心身発育に必要な鉄棒一基備えられずいる。厳冬にも、ストーブがない」という報告がある。困難な経済状態は閉校時まで続いていて、学習環境は最後まで改善されることはなかった。施設補助費、教師俸給補助費などが断続的に本国から出ている報告もあるが、1960年度からは受領していないということでも請求を出している。

生徒獲得のために、交通の便の良い、在日コリアンの多いところに学校を移転することを長年希望していたが、実現されず、理事及び学父兄会で廃校を決議したことを駐日代表部に報告している。(1961.3.13資料)しかし駐日代表部より「閉校してはならない」という勧告を受け、改めて継続を決定している。(1961.5.15資料)

### 第3章 宝塚韓国小学校をとりまく環境

#### 第1節 宝塚地域における在日コリアンの分布状況

今回の資料にみる在日コリアンの居住地は「伊子志<sup>いそし</sup>、中高松<sup>くろもと</sup>、蔵人<sup>くらんど</sup>、狸谷、西山、南口、栄町、川面、小浜<sup>こはま</sup>、惣川」という地域に分布している。



(1957.1.21 資料) 第1章第1節掲載の図1に収まる範囲で、良元村伊子志にあった宝塚韓国小学校へは2キロメートルぐらいの位置に分布している。

1958.3.17 資料によると、この当時の前述地域の在日コリアンの総人口は「1900 余名 (580 余世帯)。民族陣営 (筆者注: 民団系と思われる) 900 余名 (350 余世帯)。朝総聯 (資料ママ) 系列 1000 余名 (330 余世帯)」となっている。当時の在日本朝鮮人総聯合会 (1955 年成立) 系列の圧倒的な勢力を思うと、ほぼ互角の数字というのは信じがたいという在日コリアンの方もいる (談話より)。しかし、日本の中でも稀な韓国小学校があったことを思うと、民団系の勢力が強かったことは疑いが無い。同郷同士の結束が固かったこと、強力なリーダーシップの存在などの理由によって、日本全体とは違う独特の勢力図ができていたことが推測される。

## 第2節 子どもたちの就学状態及び生活状況

同じエリアの子どもたちの就学分布状態では「宝塚韓国小学校 63 名、朝鮮人小学校が 102 名、宝塚市立宝塚小学校 53 名、宝塚市立良元小学校 135 名、宝塚市立第一小学校 56 名」(1957.1.21 資料) となっており、民族学校に通っている割合は約 40 パーセントである。

生活状況は「900 名中、日雇労働者 (自由労働) 100 余名、11 パーセント強。職業安定所労働者 350 余名、39 パーセント弱。日本政府民生保護対象者 50 余名、5.5 パーセント。その他 (幼少年・老人) 400 名、45 パーセント弱」(1958.3.17 資料) となっている。ここにあげられている就労状態は豊かとはいえない。

民生保護 (生活保護) 対象者が 5.5 パーセントであるが、その他 (幼少年・老人) を除いた 500 名で計算すると 10 パーセントになる。どちらにしても、日本人の対象者が当時 3 パーセント弱 (国立社会保障・人口問題研究所統計) であったことと比較すると多い。1955 年末の統計で、在日朝鮮人の登録人口の 24.1 パーセントが生活保護を受け、社会的に問題視された

(森田芳夫『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』明石書店1996年)ことを考えると少ないが、現在の資料では正確に判断することには無理がある。

#### 第4章 「小学校指導要録」および「家庭調査」に見る 子どもたちの生活環境について

##### 第1節 児童の家庭および周囲の環境

子どもの指導記録としては、「指導要録」が1961年現在で6年生7人分、「家庭調査」として2年4名、3年2名、4年1名、5年2名、記載なし3名の計19名分が残っている。

児童の住所は学校と同住所である宝塚市伊予志荒地が12名おり、他の住所が6名、不明1名である。

家庭または周囲環境としての記述に19人中、不可が11人いる。1部屋の広さは6畳または4.5畳、2間か3間がほとんどで、平屋であり1間の子もいる。16畳3間が1名いるなど必ずしも狭いとは言えない場合もあるが、下に記述するように家族数が多いので、学習空間としては専用に取りにくいことが考えられる。その中でも勉強部屋有が7名いる。日本人の小学生が当時勉強部屋を持つことが一般的だったわけではないことを考えると、家族が学習に熱心だったこともうかがえる。

家族数は10名のみ記入があるが「2人1名、4人1名、5人1名、6人1名、7人2名、8人4名」である。「指導要録」に「次女1名、三女2名、三男2名、四男1名、五女1名」という記述があり、家族数が多いことがうかがわれる。母子家庭が5軒。父子家庭が1軒ある。

保護者の年齢は明記しているものだけであるが、父親では30代が3名、40代2名、50代4名、60代1名。母親は20代1名、30代3名、40代5名、50代5名となっている。

保護者の職業は父親は「土木関連、自由労務(日雇)、運送業」母親は

「失対 8 名，自由労務（職安）1 名」という記入になっている。

保護者の学歴が明記されている者では，父親，母親とも無または無学，小卒がほとんどである。

本籍は慶尚北道義城郡が 10 名ともっとも多く，あとは慶州市，慶尚南道昌寧郡，慶尚南道咸安郡，慶尚南道漆西面，慶尚南道泗川郡である。

生年月日による日本の学校の一般的学年と一致していない場合が多い。日本の小学校に通学していて韓国小学校に転入のケースもある。

学習環境の悪さを指摘する資料として「本校の位置が約 60 戸ほどの部落で，民団系，朝連（資料ママ）系，日人混在部落の中心部にあつて，当部落自体が貧困者であるので，部落人父兄自身が無教育者であり，日常校前をはじめとする付近，甚だしきは運動場内まで紛争や阻止できない行動で児童教育に大きな支障となっている」（1960.11.30 資料）また「現場所では教育上適当ではないという理由で，他洞<sup>8)</sup>の児童が集まらず，現在在校生だけが犠牲になって本校が発展できない」（1961.3.13 資料）などがある。生活の場がそのまま教育の場になって支障を来している様子がわかる。

## 第 2 節 児童の進路

宝塚韓国小学校を卒業すると，民族系の中学校が周辺にないため，ほとんどの生徒が地元の公立中学校に入学した。そのときは必ず下記のような公立学校入学願いを提出した。

「今般右の児童を宝塚市立第一中学校に入学いたせたく（資料ママ）就ては外国人として非義務教育者であることを了承し，且入学後は日本国法令並に校則を遵守することは勿論貴会及び学校に対し御迷惑を御掛け致しませんから入学を御許可下さいますようお願い申し上げます」（1960・3・15

---

8) 洞は日本でいうと村にあたる。

「宝塚市公立学校入学願」宝塚韓国小学校校長から宝塚市教育委員会宛)

上記の文書には10名の生徒の名簿が添付されているが、その半数は通称名<sup>9)</sup>併記である。

保護者の態度としては、父親は先生に一任か、無関心である。母親はやはり生活に追われていることで、余裕がないが、「児童は将来医学方面に進めたい。宿題をたくさん出し、悪いところはどしどし叱ってほしい。何とか子どもに良くなってほしいと思いつながりながらも思うにまかせず学校一任」など子どもに期待を寄せている記述も多い。好ましくないというニュアンスで、保護者である母親が、母国語である韓国語を多く使用という記述もある。子どもに関して「日本語の発音が良く出来ないの、そのほうもぜひなおさせるようにする」と記述されているケースもあり、家庭でも日本語に重点をおいている学校の姿勢が見えてきている。

## おわりに

宝塚韓国小学校は学習記録のある1961年からそう遠くなく閉校した。財政的に苦しい状況にあったこと、周囲の環境の悪さから入学してくる生徒の減少したこと、などが直接的原因の一つとなっていたことが資料からは考えられる。

しかし「小学校指導要録」や「家庭調査」を見ると、母国語の習得よりは、日本語の習得に力を入れているようであり、家庭生活全般においてもそのことに期待している。中学は、日本の公立中学校に進学せざるを得ないのだが、次の兄弟は、韓国小学校ではなく日本の小学校に入りたい希望

---

9) 通称名または通名ともいう。便宜上、本人の意思とは関係なく日本人らしい名前をつけて生活せざるを得ない場合が多かった。現在もその風潮は続いている。

があるなど、特に民族教育には拘っていない。

わずか5年前の1957年には次のような資料がある。「三千万全民族があくまでも南北統一を叫ぶ喊声を、あたかも我関せずという立場で袖手傍観し、甚だしきは父母兄弟や親友の間柄において、母国語を、敢えて日語で使用する者もあまた有り、民族将来のために痛嘆するものである。」(1957・1・21資料)

ここではこのように、日ごろからの母国語の使用を訴え、母国に帰り貢献するという将来を見据えていた。ところが1962.3.27資料では母国語解読不可という評価の在日コリアンの教師も登場している。祖国の政治状況や政変により在日コリアンの生活状況も変化していったのではないだろうか。

閉校の要因としては、財政等様々にあったにしても、韓国小学校を継続して、母国に適應する子どもを教育していくという目的が失われていったのではないか。日本の社会で生きることを選択して、子どもの将来を日本の教育に託していくという意識の変化が大きな一因になって「宝塚韓国小学校」はその役目を終えたのだと考えられる。それは必ずしも自分たちの意に沿う決断であったこととは考えられないが、現実的に生きていくための止むを得ない選択肢であったのではないかと推察される。

#### 参 考 文 献

- 高賛侑「国際化時代の民族教育」(東方出版 1996年)  
国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会「在日コリアン辞典」  
(明石書店 2010年)  
徐京植「秤にかけてはならない」日朝問題を考える座標軸(影書房 2003年)  
宝塚市史 第1巻～第3巻  
宝塚市大事典編集委員会編集「宝塚市大事典」(宝塚市 2005年)  
鄭鴻永「歌劇の街のもうひとつの歴史 宝塚と朝鮮人」(神戸学生・青年セン

ター出版部 1997年)

『兵庫のなかの朝鮮』編集委員会「兵庫のなかの朝鮮」(明石書店 2001年)

森田芳夫「数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史」(明石書店1996年)

ホームページ「アンニョン宝塚」

<http://www.eonet.ni.jp/~kjn/annyongindex.html>